

4 岡山市民の防空

航空機が発達して兵器としてみなされるようになる中、昭和初期から一般国民も空襲に備えて立ち向かわなければならないという気運が高まります。1928年（昭和3）には大阪で初めて軍・官と民間が協力して大規模な防空演習が開催されました。翌年には名古屋、1933年（昭和8）には東京でも行われます。岡山では1935年（昭和10）、当時の岡山市長、石原市三郎が強く主導して初めて行われました。11月3日には練兵場（現岡山総合グラウンド）で約5000人が参加して防護団の結成式が行われ、11月23日に本演習が行われています。

1937年（昭和12）には防空法が制定され、政府は灯火管制・避難・救護活動などの防空活動を行うことを義務化します。また、1939年（昭和14）にはそれまでの消防活動と防空の双方の役割を担当する警防団がおかれました。岡山でも学区単位で警防団が組織され、町内会単位で定期的に防空演習が行われました。しかし実際には大規模な空襲の前では、こうした訓練による消火などは、ほとんど役に立ちませんでした。



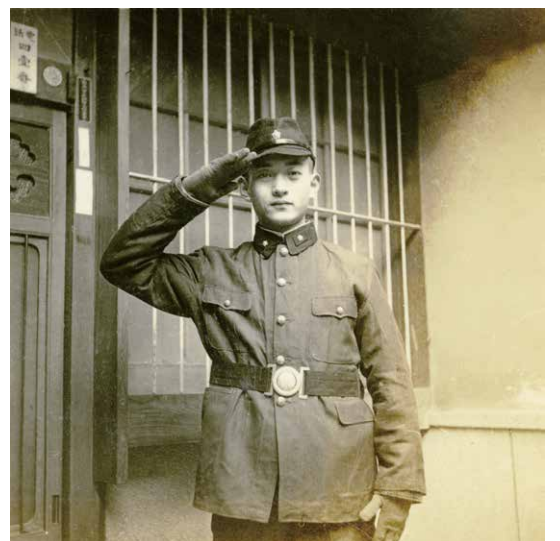
62 『第一次岡山市防空演習録』 岡山市防護団本部
63 『昭和十年度岡山市防空演習教令』 岡山市防空演習統監部
1935年（昭和10）岡山市立中央図書館所蔵・画像データ提供

64 防空 岡山市バッジ

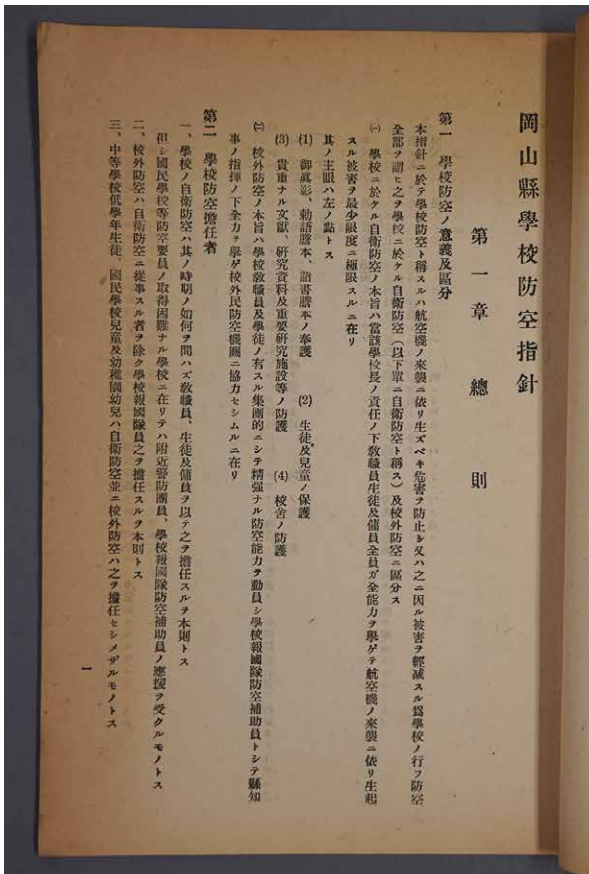
岡山市内での防空演習の様子 個人所蔵
上からガスマスクをつけて無毒化作業をする人、放水、模擬焼夷弾、警防団員。時期不明



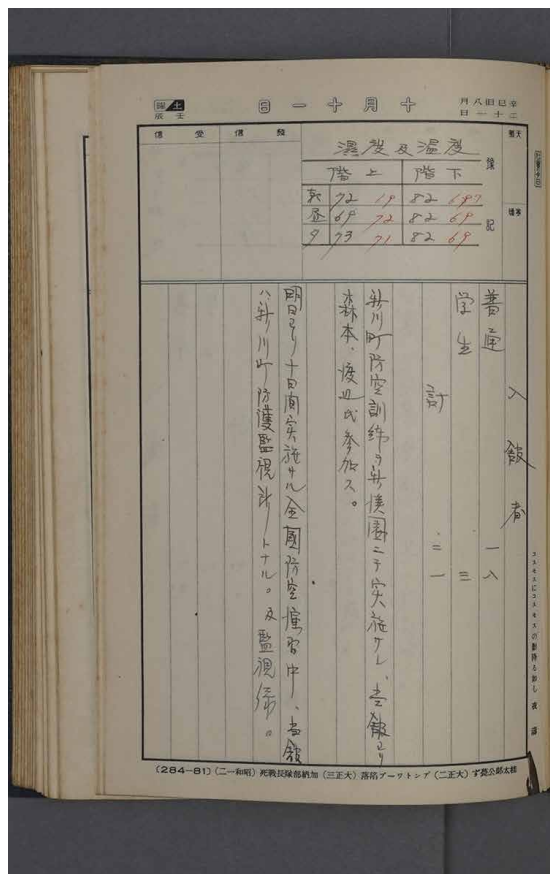
上 65 岡山市防護団南方分団副分団長の腕章 下 66・67 南方分団長の腕章
岡山市南方町内会の防護団のもの。時期は不明ですが、おそらく警防団が組織される1939年（昭和14）以前のものと思われる。



警防団の制服を着た人 正本写真館所蔵



74 『昭和十八年十一月 岡山県学校防空指針』 岡山県立図書館蔵
1943年(昭和18)11月 岡山県立図書館蔵
学校の防空は自衛防空であること、守る順位は御真影と教育勅語が1番で、生徒は2番目であると書かれています。



68 『大原美術館日誌 1941年』 公益財団法人 大原美術館蔵
この日誌の10月11日の条には翌日から10日間にわたって全国防空演習が開催されることなどが書かれています。



75・76 灯火管制用の電灯傘 77・78 金星防空ランプと箱
79・80 マツダ灯火管制用電球と箱
灯火管制用ランプと紙製の電灯の傘です。いずれも灯りが外に漏れないよう、下だけを照らす仕組みとなっています。岡山の人たちは実際には黒い布を電灯の傘に取り付けるだけという手作りのものを使う人が多かったようです。窓にも黒いカーテンをかけることが良いとされましたが、布地の入手も難しく、黒い着物をかけたとか、新聞に墨を塗ったものをかわりにしたということもあったようです。

5 出征していく兵士達

日露戦争後、日本は中国東北部の鉄道経営の権益をまもるとして軍を駐留していました。1931年(昭和6)、日本の関東軍は中国軍が南満州鉄道を爆破したようにみせかけます(柳条湖事件)。以後奉天などへ攻撃し、満州全土を占領して翌年には満州国を設立させます。また、同じ年には上海に武力介入し、各国からの批判を浴びることとなりました。このときに爆破筒を持って敵陣に突撃する兵士を「爆弾三勇士」として軍は意図的に英雄扱いをし、自己犠牲的な戦争協力賛美の雰囲気を作りあげました。

そして1937年(昭和12)7月に日中戦争が始まるとさらに多くの兵士が徴兵され、出征していくこととなります。



91 『護國之神 肉弾三勇士』大和良作・栗原白嶺 共著、日本国防協會内護國團発行 1932年(昭和7)4月1日
94 護國之神 肉弾三勇士文鎮



92 本社懸賞募集当選肉弾三勇士の歌 大阪朝日新聞社
93 爆弾三勇士の歌 大阪毎日新聞社 東京日々新聞社



上 99・100「千人針腹巻」と収納箱 梶原亀鶴少佐関係資料
下 102 電車優待乗車券 103 靖国神社祭神遺族鉄道乗車証
1937年(昭和12)12月5日に上海で戦死した梶原亀鶴少佐が戦死した際に身に付けていた千人針と、翌年靖国神社での臨時大祭(招魂式)に招待された遺族に発行された電車の優待乗車券などです。戦争が激化して戦死者が増えるにつれ、こうした優遇は行われなくなっていきます。



96 日章旗
1937年(昭和12)9月の上海上陸から12月17日の南京入城までの行程が記入されています。



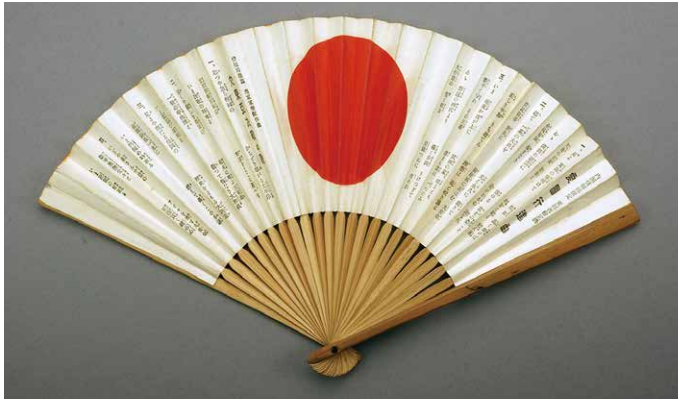
左 105 御守袋 106 吉備津彦神社武運長久御守 107 石切劔箭神社御守 108 御守 109 身代不動御守
右 110 千人針

1944年(昭和19)8月13日にビルマのタンガブで戦病死した柳金夫の遺品です。手製でしょうか、お守り入れには吉備津彦神社の武運長久のお守りや、身代不動尊など、出征兵士の安全を願うお守りが入っていました。

また、千人針は結び目が表面に出てノミやシラミの住処にならないよう、布を一枚上にかぶせてあり、腹部にあたる部分にはお守りが入っています。

6 翼賛体制下の生活

1940年（昭和15）、近衛文麿内閣は「国防国家体制」樹立の方針を示し、全ての政党は解散して10月に大政翼賛会が結成されました。地方には支部がおかれ、各界の名士が所属しました。また、各業種や団体も既存の組織は整理統合され「報国」や「翼賛」の名を冠した新たな組織へと再編されていきます。都市には町内会、郡部には部落会が作られ、下部組織としての隣組は国民の生活を支配しやすくするものでした。



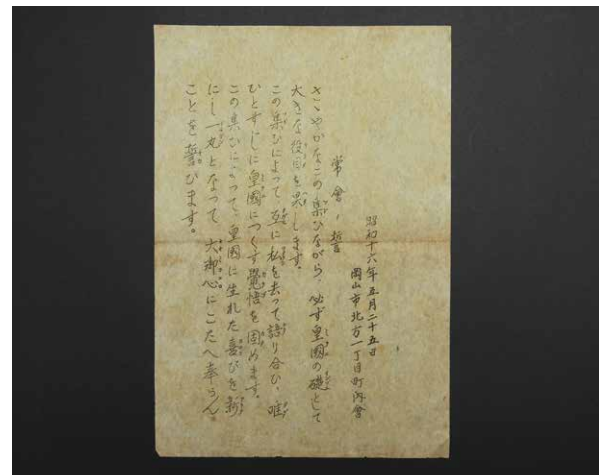
111 扇子
一面には「大東亜決戦の歌」「愛国行進曲」の歌詞、もう一方の面には「必勝」と印刷されています。



112 帝国在郷軍人会会員徽章 113 翼賛壮年団徽章 114 商業報国会徽章 115 日獨伊防共協定成立記念徽章 116 軍人援護徽章 117 金保有状況調査委員徽章



130 「大政翼賛」と彫られた木製盆
1941年（昭和16）ごろ
裏面には「岡山市町内会結成記念」と印刷されています。



131 常会ノ誓 岡山市北方一丁目町内会
1941年（昭和16）5月25日
町内会が結成されると月に2回程度、常会という集会が開催されましたが、その冒頭などに唱和する文章です。



133 『隣組読本 戦費と国債』 大政翼賛会発行
1941年（昭和16） 岡山市立図書館所蔵

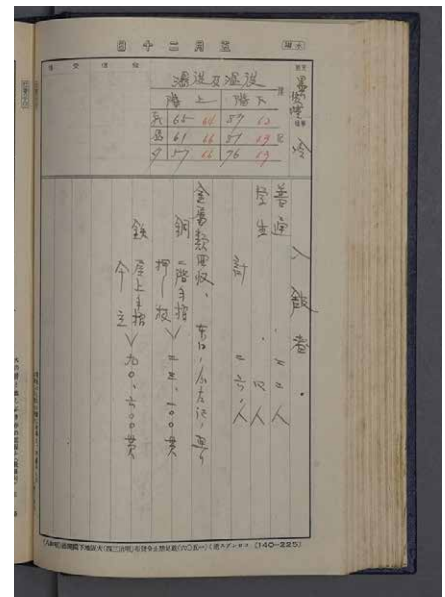
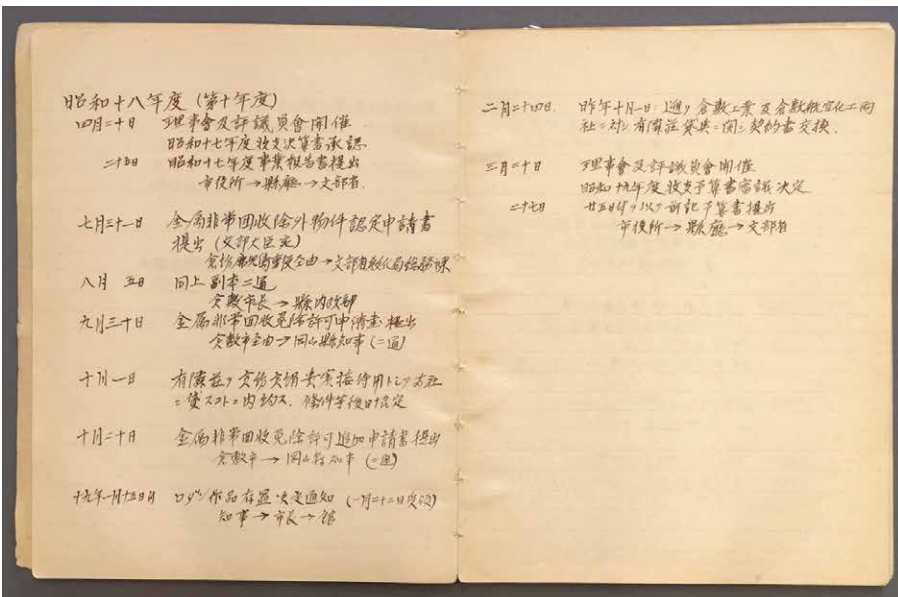


134 『大政翼賛運動一年史』 大政翼賛会岡山縣支部
1941年（昭和16）11月 岡山市立図書館所蔵

- 118 国民服上着
- 119 国民服ズボン
- 120 もんぺ
- 121 女性用防空頭巾
- 122 中学校男子用制服

物資が不足し、衣料品も食料も軍需品が優先される中、衣類は簡素で労働がしやすいものの着用がすすめられました。

国民服は1940年(昭和15)に国民服令によって制定されました。儀礼章を身につければ、冠婚葬祭どれにでも対応できるとされ、男性のほとんどが戦争末期には着用していました。女性はスカートや着物にかわり、もんぺの着用が推奨されました。



左 138 『大原美術館重要庶務要項抄 第一』 1943年(昭和18)

右 139 『大原美術館日誌1942年』 1942年(昭和17)

どちらも公益財団法人 大原美術館所蔵

戦争が激しくなると、物資が不足する中、兵器を作るための金属を確保するために家庭や職場の金属製品を供出させられるようになりました。やかんや火鉢、大きいものではバルコニーの手すりや階段など、あらゆるものを国のために供出させられる中、美術品もターゲットとなりました。大原美術館では既に前年より手すりや傘立てを供出させられていましたが、ロダンの彫刻も供出せよという話が出たのが1943年(昭和18)のことでした。当時の武内潔真館長は金属非常回収免除申請書を提出するなど、なんとか回避をはかります。やっと存置決定通知が届いたのは翌年1月になってからのことでした。

(5月20日条)

金属類回収、本日ノ分左記ノ通り

銅 二階手摺 二三、一〇〇貫

押し板

鉄 屋上手摺 九〇、六〇〇貫

傘立

←ロダン作 カレーの市民 公益財団法人 大原美術館所蔵



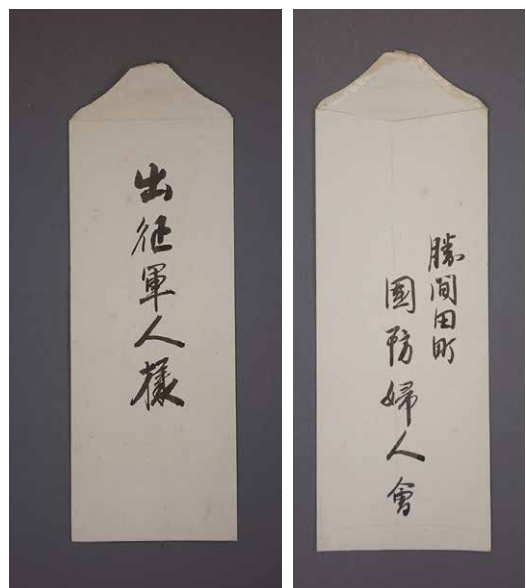
158 愛国婦人会のたすき・愛国婦人会会員章
159 愛国婦人会協約状 1941年(昭和16)4月9日



160 肩掛け鞆
161 大日本国防婦人会のたすき
たすきには「佐伯 大日本国防婦人会」とあります。



出征兵士の見送り 1940年(昭和15)頃 坂本一夫撮影
出征兵士の見送り風景です。割烹着にたすきがけの国防婦人会の女性達が見えます。



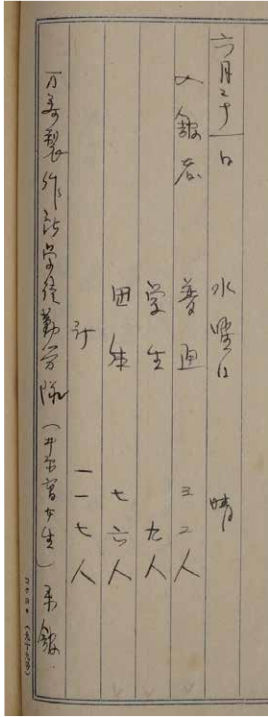
164 封筒 個人所蔵
勝間田町国防婦会が出征兵士にあてた慰問状の封入用封筒。



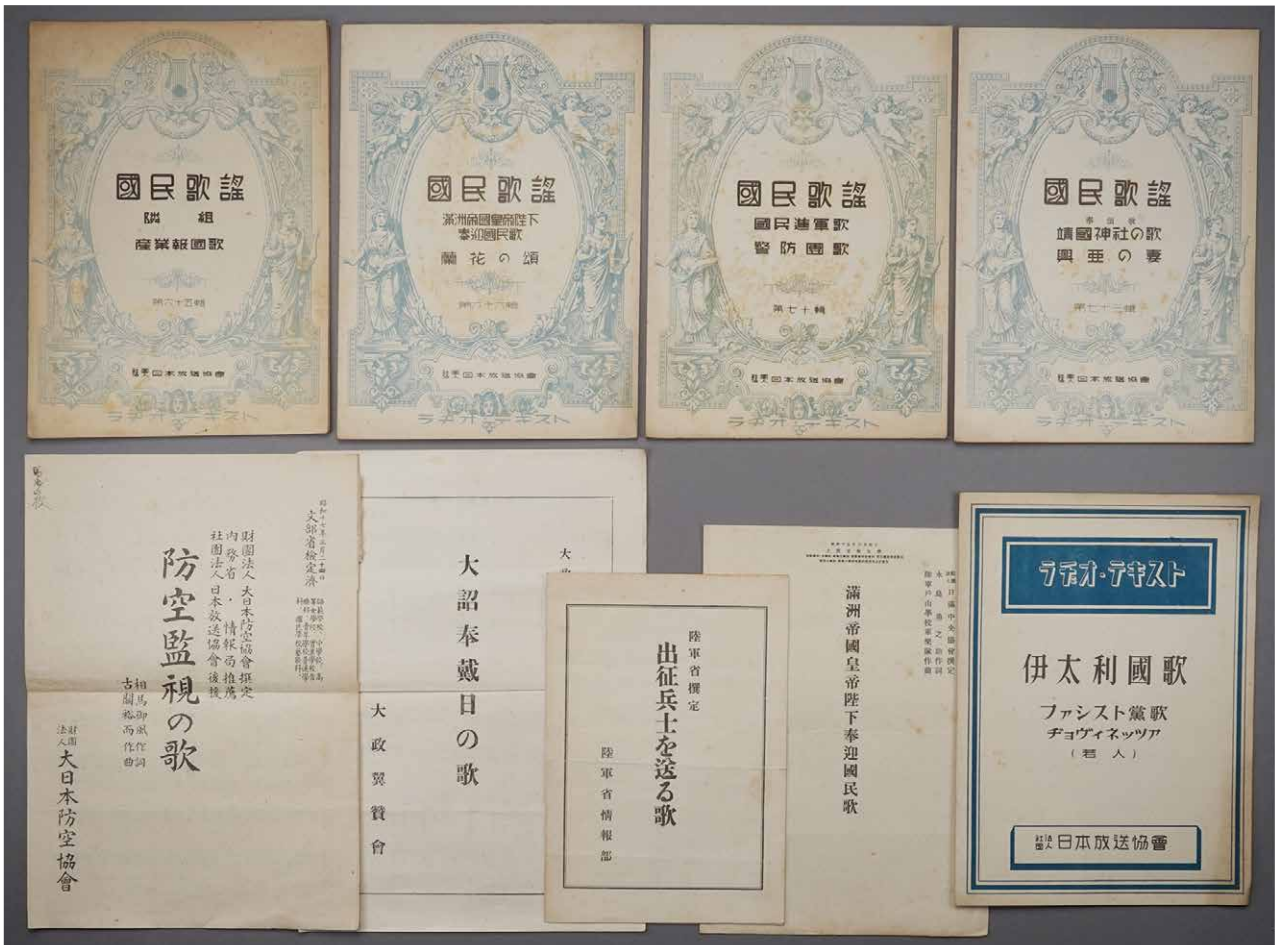
165 全国婦人団体統合記念陶器製文鎮 左 表面 右 裏面「昭和十七年 全国婦人団体統合記念 愛国婦人会岡山県支部」(裏面刻印)
岡山市立中央図書館所蔵・画像データ提供

1932年(昭和7)に出来た大日本国防婦会は急速に全国に広まり、岡山でも一大勢力となりました。それまで一部の女性だけが参加していた愛国婦会、連合婦会と勢力をきそようように出征兵士の見送りなどで活動していました。しかし婦会も他の組織同様、政府によって統合され、1942年(昭和17)には大日本婦会となりました。165は統合されることになった愛国婦会が記念に作成した文鎮です。金属が貴重な時代のこと、陶器製であることも興味深い資料です。

万寿製作所学徒勤労隊（井原高女生）来館



左 144 『大原美術館日誌 1944年』 1944年（昭和19）公益財団法人 大原美術館所蔵
 右 倉敷紡績倉敷万寿工場でタガネをうつ訓練をする岡山県井原高等女学校の生徒 1944～1945年（昭和19～20）森下雅子所蔵
 倉敷市には軍需工場が多く、全国から学徒勤労動員の学生たちが集められていましたが、1944年（昭和19）以後の「大原美術館日誌」には学生たちの入館記録が多く見られます。



148 「ラジオ・テキスト 伊太利国歌」 149 「国歌謠 隣組 産業報国歌」 150 「国歌謠 満洲帝国皇帝陛下奉迎国民歌 蘭花の頌」 151 「国歌謠 国民進軍歌 警防団歌」 152 「国歌謠 奉頌歌 靖国神社の歌 興亜の妻」 153 「満洲帝国皇帝陛下奉迎国民歌」 154 「陸軍省選定 出征兵士を送る歌」 156 「大政翼賛会制定 大詔奉戴日の歌」 157 「防空監視の歌」 すべて個人所蔵
 1940～1942年（昭和15～17）頃の伴奏用楽譜。馬屋下国民学校（現岡山市馬屋下小学校）で教師をつとめていた女性のもの。当時の世相を伝えるタイトルの歌謠です。

7 戦時下の子どもたち



兵隊ごっこをして遊ぶ少年達 1940～1941年(昭和15～16)ごろ 岡山市北区表町 個人所蔵
鉄兜をかぶり、日章旗や鉄砲のおもちゃを持って遊ぶ子どもたち。一番左の子が隊長さんです。



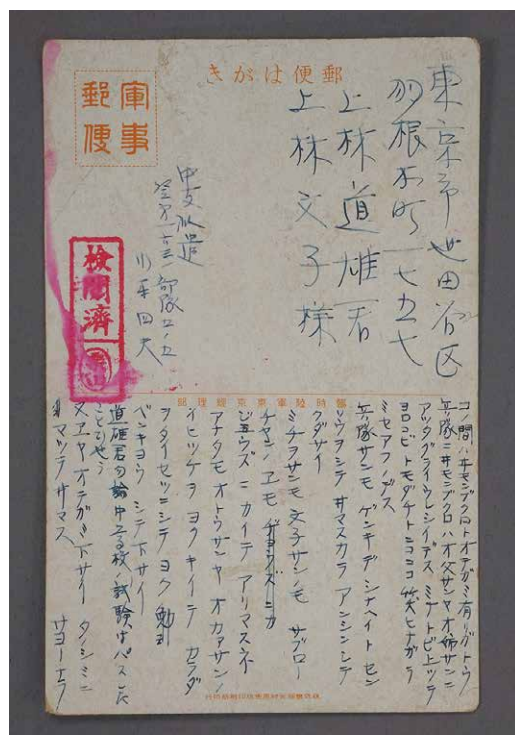
慰問袋を持つ伊島小学校の少女たち 岡山市立伊島小学校所蔵
1934年(昭和9)以降



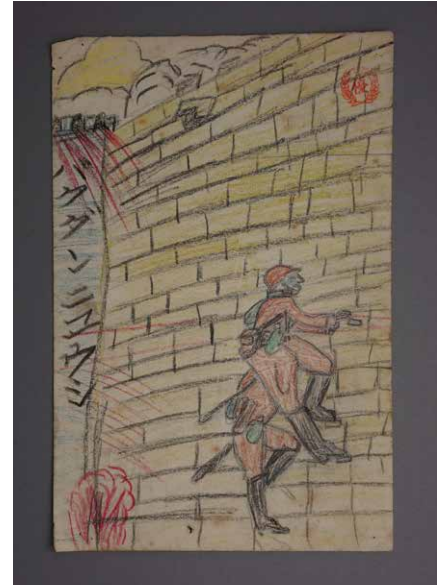
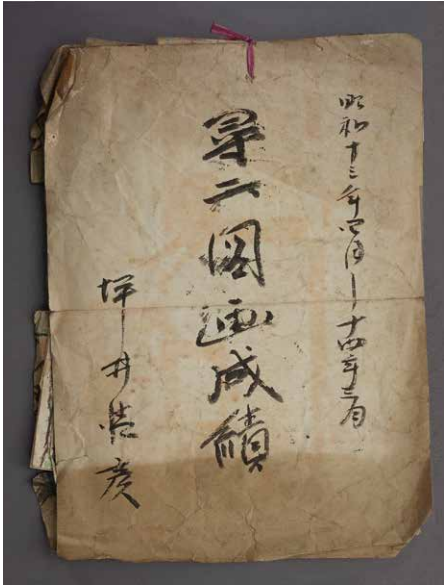
196・197 メンコ
慰問袋を持つ国防婦人会の女性や手榴弾を持つ兵士、親子爆弾など戦争を意識させる内容のおもちゃです。

戦時下の社会では子どもたちにも戦争協力が強いられました。男の子は国のために強い兵士や賢い技術者に、女の子は兵士となる子どもを沢山産み、丈夫に賢く育てられる良い母になることが求められました。

兵士への慰問、戦費調達のための貯蓄や労働も大人同様、出来る範囲で求められました。戦時下の子どもたちが残した作文や図画、大人たちが与えた玩具には子どもたちを取り巻いていた環境が反映されているといえます。



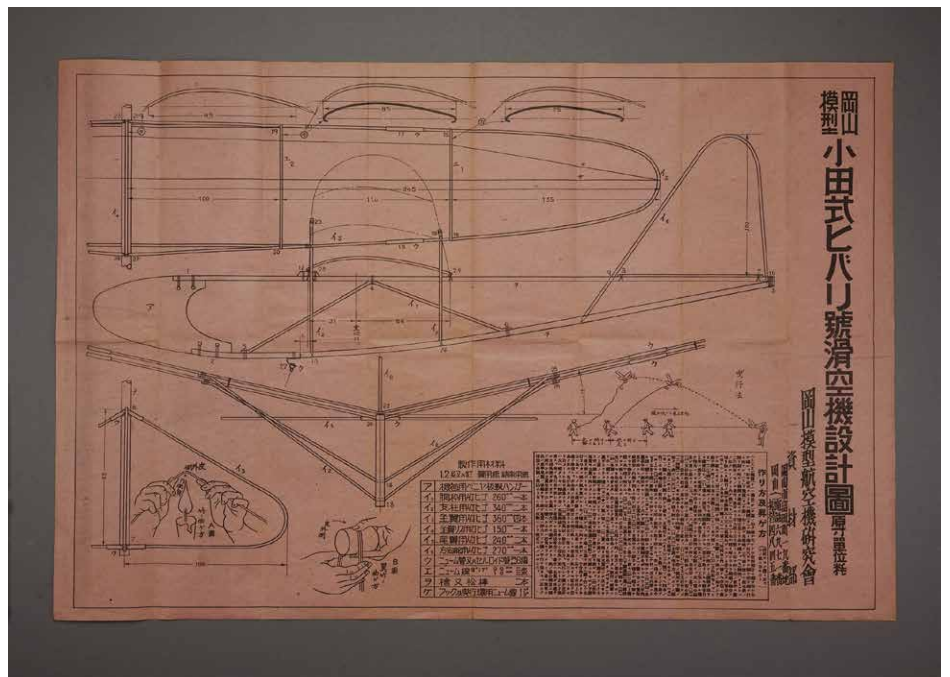
203 上林道雄・文子あて川本四夫葉書 個人所蔵
慰問袋への謝辞が書かれています。全く知らない兵士から返信が来ることは良くあったようです。



左より 199 図画綴「昭和十三年四月 - 十四年三月 尋二図画成績 坪井清彦」 200 図画 日本刀と日章旗をもって戦う日本兵
201 図画「バクダンニユウシ」 いずれも 坪井清彦 作 個人所蔵



202 図画 慰問袋を手に休む兵士
坪井清彦 作 個人所蔵



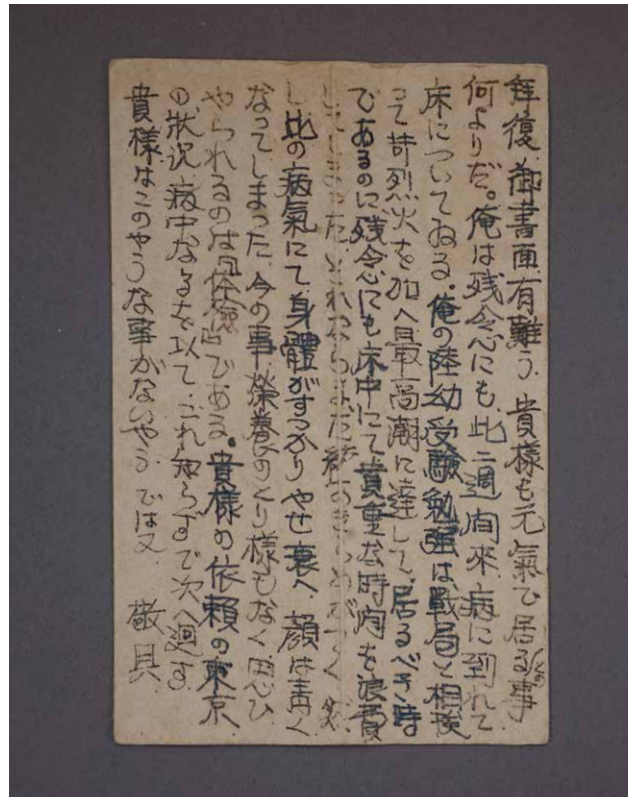
185 模型飛行機設計図
「岡山模型 小田式 ヒバリ号滑空機 設計図」
岡山模型航空機研究所資料部発行
戦時中、模型飛行機は科学への理解を深め、技術力を高められるよう、子どもたちに推奨されていました。



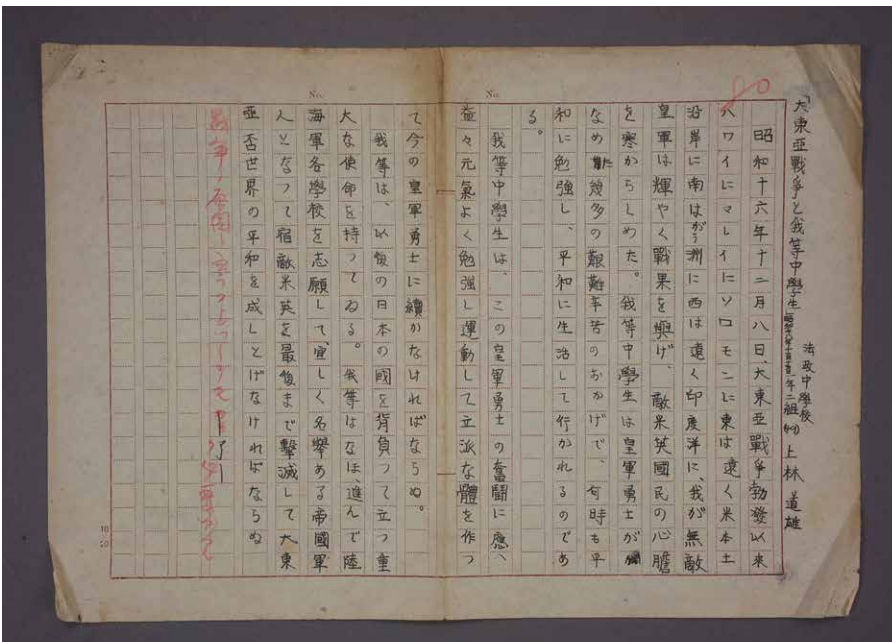
182 紙芝居用木枠
「寄贈 大日本産業報国会 中央本部」と裏面に印刷されています。前面のマークは大日本産業報国会のものです。



184 紙芝居 二人の警防員
警防団員の活躍が描かれた紙芝居です。こうした戦争や国家への協力を宣伝するような紙芝居のことを国策紙芝居といい、政府の支援で多数作られました。



210 上林道雄あて所清孝葉書 個人所蔵
207、208の所蔵者は、1944年(昭和19)に縁故疎開で岡山へ移転しました。これは東京の同級生からの葉書で病気で陸軍幼年学校の受験が難しくなっていると書かれています。



207 作文「大東亜戦争と我等中学生」 上林道雄 作、昭和18年11月17日 個人所蔵
日米英開戦時のことをふりかえり、「宿敵米英を最後まで撃滅」と書かれています。



208 陸軍幼年学校受験受験票 個人所蔵
当時の法政中学校は軍事教練などに熱心な学校でした。生徒達も軍人を目指す子どもが多かったようです。



216 米子の中の島 陳天生活繪卷 山下米子 作、紙、墨、クレヨン、部分 1945年(昭和20)10月 個人所蔵

東京都文京区の東京高等師範学校付属国民学校の3年生の女の子が1945年(昭和20)3月23日に新潟県南魚沼市の石打に疎開に行った際のことを終戦後の10月に思い出して描いたものがまとめられています。この学校は比較的めぐまれた食料事情だったようですが、それでも自分たちで食料を採集したり、調達している様子が描かれています。わらびの採集量でおやつの量がかわったり、イナゴをつかまえたりといった様子が描かれています。

Column

文献史学から見た戦争資料

長 志珠絵 神戸大学国際文化学研究所 教授

私は歴史の文献研究者として、神戸の空襲記録運動そのものにフォーカスをあてる取り組みを行っている。市民運動としての空襲記録運動は従来、地域の歴史研究と交差する機会に乏しかった。言い換えれば、2000年代にいたってなお、歴史研究者の手になる自治体史はしばしば、各地の空襲記録運動の成果をとりこぼしてきた。

他方、故小山仁示氏が提起されたような、空襲記録運動が積み重ねた証言が地上の人々の記憶と記録であるのに対し、鳥の目として米軍資料という対比は、特に後者の成果は目覚ましい。だが近年、防空研究や戦後の補償運動の記録化をはじめ、現代史資料としての文献研究との接合も重要な段階を迎えているように思う。何より1970年代に活動を開始した各地の空襲記録運動は、記憶の風化に加え、記録が散逸しつつある可能性にもさらされている。言い換えれば、運動の足跡そのものが現代史資料として体系的に記録され検証される段階、運動が蓄積してきた資史料のアーカイブが必要となる段階にある、と考えたい。

報告者が関わってきた神戸空襲を記録する会は、他の会より当事者世代からの交代が早く「戦後70年」では戦後生まれ世代が担った。この動きは加速度的に進んでいる。各地の会がどのようにネットワーク化をはかってきたのか、あるいは「1970年代の地域市民の平和運動」はどのように「地域の歴史遺産としての〈戦災史料〉を蓄積させてきたのか。戦後史の市民・住民の平和運動としての空襲記録運動とその文化遺産として軌跡をたどり、あるいはミニコミ誌的な発信物をアーカイブ、再編集するなどの取り組みによって、「戦災アーカイブ」の構築とその可能性・寄与を考える取り組みを紹介する予定である。